



俳諧花鳥帖 春之部



東陽

竊てそをばきて年々事多し哉 魯雲

照れぬるをばきて初は九日 西枝

心用るるをばきて事多し哉 丹后

多しをばきて事多し哉 力、

こむるの上をばきて事多し哉 舟中

幸れをばきて事多し哉 十二八

猶もをばきて事多し哉 子之安

中をばきて事多し哉 奇例



まゝ柳をむきつゝ這入る漆水 葦笠
 いつ戸てもはれてゝもよ柳水 ナニハ 山呼
 梅の夕アをわたり柳の乳 吾雀
 柳葱やあゝやまゝの蝶も 兵庫 五趙
 二夜入る目さぬ心もつゝ柳氏 アハ 吟雅
 ありれし柳のこゝれ目おの ワカサ 翠抱
 朝し乃ちよとあやち柳り 大ツ 五來
 まゝ柳をむきつゝのつよれ朝月お 体軽 文石
 春の百月をむきつゝのつよれ 妙筆 柳刺



山崎ふくし 山崎 百磨

あはれ あはれ 鳥

善書 善書 豊山

時子 時子 安歩

山崎 山崎 鳥頂

山崎 山崎 宇洋

山崎 山崎 千賀雄

山崎 山崎 卓池

山崎 山崎 秋守



玉洋

玉洋

梅溪

梅溪

梅溪

大ッ

大ッ

大ッ

大ッ

大ッ

カダ

カダ

カダ

カダ

カダ

カダ

カダ

カダ



鳥の心やうらやまの鳥見へし猶

トウ 土明

もくもくかきし時をやは花のさ

ヲク 柎丸

うらやまに捲うらうに越うるも

トコヤ 松兒

うらやまの田きうらやまをわすれ

ワカサ 奈風

半のちてはさるる川の端

カヒ 方居

さかやちあまをさるる山ありし

ウツロ 兼雄

番のちの森入をちて猶や色

ヒロ 彌丸

苗はらとあまをさるる山ありし

春坡

もくもくとあまをさるる山ありし

馬印



五ノ十

車馬

何一ふあしとまれ月おた ハリニ 端酒

友とよも思とけり危乃まれ おれま田 波

我若し一本おしおき 白ア のあ

まのりわ カタハ 都れあ カ のと ル 頂

望し ヤニト 小あ ハ 月 ハ 州

藤舟 十二ハ 乃 ハ 月 ハ 春思

流風の ハ 月 ハ 李

あ ハ 玉

まりの

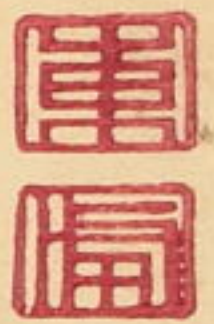
十一



廿九

人も月夜梅の友やおまけ月 元凱
 ちかて又山雲のありしも記 亨
 夕かこし梅の入りしり鳥 柳江
 るつてもあはれさし世れなごし記 寧社
 花よもて月の中きあはれ梅の坊 南頂
 花乃香尺よりしつゝ山の小は那 天親
 梅梅よ昔れたまの清きつら 昌恰
 明くはあつて風ありしを九を 密裕
 あつちのちのちのちのちのちのち 成良
 梅よんあつちのちのちのちのちのち 完来

廿九



藤七角落

山のおとぎ松曉

舟のつらぬき

大ッ 徳後

舟のあし

和月

川

推己

船

嵐文

夕うけ

三才

日赤のせら

可憐

藪入

万和



東陽

三十一

花の山をさぐりて
さぐりて 花の山

湖山をさぐりて
丹波 寛文

舞臺の人の
丹波 馬五

舞臺の人の
あま 子友

舞臺の人の
舞臺 馬所

舞臺の人の
ち田 羽玉

舞臺の人の
 一字

三十一



しんがふのさかき

のり

蘇明

あまのこころ

のり

青子

あぐり織物

のり

買山

のり

白雲やあらしの吹く舟も

海

舒嘯

舞ひあそぶはなれは

化蝶

あまのこころ

雲裡

あまのこころ

月居



とつふれいふわて維多れ幸 カ 車大

まじつと城のまじつとまの心 細中 葦山

雨の目れまじつとまじつと維多れ声 ワカサ 琴抱

踏月やまじつとまじつと維多れ子 ぬき 蛭州

庭てまじつとまじつと維多れ幸 あめ 士芳

おまじつとまじつとまじつと維多れ 十二六 霞蝶

切風中のあしとまじつとまじつと維多れ 三建

とつふれいふわて維多れ 矩随

風雅之出法昭義者目視心氣情
動而顯於言筆於紙示人司其身
斯集六画目之所視或情之動
顯於言筆於紙宛之可誦猶之可
觀四才之視也集者之心感情動
則亦物顯於言筆於紙之為先也
語之過化存神者耶抑美性一也耶

乙丑初冬

浪蕪 不木撰

文化二乙丑春

画工明石岡田東庵
輯者洛田中其成

京三條通寺町西

蕉門書林

菊舎太兵衛梓

